

(52)

氏名(生年月日)	カネ コ カヨ ヨ 金 子 佳 世 子
本 籍	
学 位 の 種 類	医学博士
学位授与の番号	乙第1051号
学位授与の日付	平成元年11月17日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当(博士の学位論文提出者)
学位論文題目	顔面対称性後天性真皮メラノサイトーシス(仮称) —いわゆる対称性太田母斑の臨床的研究—
論文審査委員	(主査)教授 肥田野 信 (副査)教授 平山 峻, 藤田 昌雄

### 論 文 内 容 の 要 旨

#### 目的

太田母斑は黄色人種に頻発する色素異常で、通常片側性に現われる。それに類似したもので、成人期になり顔面左右対称性に発生する色素沈着があり、独立疾患か否かが問題となっている。そこでその臨床所見を中心に検討し、その独立性について考察した。

#### 対象

昭和50～60年に東京女子医大皮膚科を受診し本症と診断された39例を対象とした。

#### 結果

- 1) 性別統計：男性4例、女性35例で男女比は1：9であった。
- 2) 発症年齢：12～53歳に分布し、約8割が20歳以後の発症で、生来性のものはない。
- 3) 家族歴：家族内発症が2組あり、それぞれ皮疹の分布、色調、発症年齢とも酷似していた。
- 4) 分布：額中央、額両側、こめかみ、頬骨部、上下眼瞼、鼻根、鼻翼について色素沈着の発現頻度を検討した。頬骨部が最も多く、特に女性では74.3%であった。次いで額両側が53.7%、男性では75%である。
- 5) 色調、形態：個疹は淡褐～灰褐～紫褐色の色素沈着で青色調は呈さない。大きさからみて、小斑と大斑とがあった。
- 6) 合併症：口蓋メラノシスの合併は1例もない。眼球結膜の色素沈着は6例に認めたが、青色調の濃いものは1例もなかった。
- 7) 組織学的所見：光顕では真皮上～中層に散在す

る真皮メラノサイトが認められた。電子顕微鏡検査では、真皮メラノサイトの核は大型で、胞体内に多数のメラノソームがほぼ均等に分布していた。メラノソームは大多数がIV型で、II型、III型も少数みられた。メラノサイト周囲は微細な線維構造よりなる extracellular sheath で取り囲まれていた。

#### 考察

通常の太田母斑と比較して、本症では男女比1：9で圧倒的に女性に多い。発症年齢は思春期前はほとんどなく、20歳前後と40歳前後にピークがあり、特に中年以後の発症から、母斑との解釈は困難である。時に、家族内発症がみられ、浸透度の低い常染色体優性遺伝と考えられる。

典型的皮疹は頬骨部に左右対称性にバラバラと散在する小紫褐色斑で、青色調はない。以上の点から本症は太田母斑の特殊型というより、別症と考えた方が妥当と考えられた。ただし組織学的には太田母斑と区別できない。

#### 結論

本症は従来太田母斑との類似から両側性対称性太田母斑といわれてきたが、発症年齢、性比、遺伝、合併症、皮疹の形態、分布など太田母斑とは異なる性質があることから、独立疾患として、顔面対称性後天性真皮メラノサイトーシス acquired symmetrical dermal melanocytosis of the face という名称を提唱した。

## 論文審査の要旨

本論文は、以前から漠然と両側性太田母斑としてとらえられていた病態を、一つの clinical entity として明瞭に把握したこと、さらに従来先天性とのみ考えられていた真皮メラノサイトーシスが後天性にも生じうることを明らかにすることによって、新たな疾患概念への道を開いたもので、学術上価値あるものと認める。

### 主論文公表誌

顔面对称性後天性真皮メラノサイトーシス（仮称）

—いわゆる対称性太田母斑の臨床的研究—

皮膚科の臨床 第30巻 第13号

1649-1659頁（昭和63年12月1日発行）

### 副論文公表誌

1) 皮膚筋炎と悪性腫瘍

皮膚臨床 27 (5) : 499-505, 1985

2) 原発性胆汁性肝硬変と Sjögren 症候群を合併した CREST 症候群

臨皮 41 (4) : 321-325, 1987

3) 新生児の Sucking blisters

小児科 28 (12) : 1633-1637, 1987

4) 壊死性遊走性紅斑の1例

臨皮 42 (1) : 33-37, 1988

5) 妊婦の風疹

皮膚臨床 30 (2) : 141-145, 1988